

## 内モンゴル・ホルチン地方におけるシャマンの太鼓

サラングワ

キーワード：ホルチン地方、シャマン、伝承、太鼓

### はじめに

ホルチン地方では、シャマンは、治療・祭祀儀式、シャマンに憑依する守護霊を体にとり入れるため、招き呼ぶときにヘンゲルゲ（太鼓）を用いることが多い。仏教の影響により、太鼓の代わりに、チャン（シンバル、仏具の鐺鉢）を用いるシャマンもある。近年、内モンゴル・ホルチン地方でシャマニズムが復活しつつあり、弟子シャマンが太鼓を叩きながら神歌を歌って、守護霊を招き呼ぶ。太鼓は、シャマンにとって、重要な道具であり、シャマンとしてのアイデンティティの象徴ともなる。ホルチン地方では、現在、基本的に片面太鼓が使われている。類似例として、周辺の満洲族にも見られる。ホルチン地方のシャマンの伝承の中で、死体化生によって、太鼓が生まれたと語る場合がある。また、シャマン太鼓は、もともと両面太鼓だったが、仏の金剛杵に打たれて破り、片面太鼓になったと語る伝承もある。そこで、伝承で語るように、ホルチン地方のシャマンが用いる太鼓はもともと両面太鼓だったか。本論では、まず太鼓に関するいくつかの伝承を検討し、次にホルチン地方のシャマン太鼓の構造とその機能を分析する。そして、シャマンが太鼓の代用品として使われる道具を取り上げ、太鼓の機能を果たす理由を検討する。

### I ホルチン地方の片面太鼓の由来に関する伝承

ホルチン地方で、シャマンの装束、道具に関する伝説は、基本的に、2種類がある。1つは、ホルチン地方のシャマンの元祖と言われるホブグタイの妻を、ホブグタイの弟が誤って死なせたことによって、妻の遺体で太鼓を含めたシャマンの装束と道具を作ったと語る由来譚、もう1つは、仏とホブグタイ・シャマンとの勝負で、ホブグタイ・シャマンの両面太鼓が仏の金剛杵に打たれて破られたため、今日のように穴がある片面太鼓となったと語る変容譚である。以下、上述した2種類のモチーフをもった伝説の具体的な内容を述べる。2話とも筆者が現地調査で得た一次資料である。

#### 1) ホブグタイの妻の体がシャマンの装束と道具になる—「死体化生」伝承

2005年8月に筆者が、ホルチン左翼後旗ハラオソ村で、シャマンの祭天儀礼を参与観察した際に、儀式を取り仕切ったホルチン左翼中旗ジルへ牧場在住のシャマンSB<sup>(1)</sup>にインタビューを行って得た

<sup>(1)</sup> 1931年生まれ、農民。母方の伯父を継承してシャマンになった。

伝説である。

兄の名はホブグタイ、弟はガルブで、二人とも猟師である。ある日、弟のガルブが、兄の家を訪ねると、ホブグタイは猟に出かけており、義理の姉がいた。驚かそうと戯れに矢を射たが、思いがけず的中し、姉は命を落とした。ガルブは、非常に悔やみ、兄が帰宅すると深く謝罪した。そこで、兄のホブグタイは、「私は、狩猟を行って多くの動物の命を奪った。この事件は、罰である。これからは心身を正し、猟を行わない」とテングリ（天神）に誓って、修行に入った。弟も猟師であるため、兄のホブグタイと同じく、反省し、修行した。父なるテングリ<sup>(1)</sup>は二人を許して、ホブグタイに、「ブォ・イン・デード」（シャマンの元祖）の称号を与え、弟のガルブをシャマンにした。ホブグタイは、弟と一緒にシャマンとして民衆に功德を施すため、シャマンの装束、道具が必要となった。そこで、亡き妻を永遠に偲び、その遺体でシャマン装束のシャマン帽子、シャマン服、道具の太鼓と銅鏡を作ることにした。妻の頭蓋骨でシャマンの帽子を、髪の毛で帽子のリボンを、眉で、目を隠すために帽子の前に垂らす房飾りを、胸骨で太鼓の枠を作り、シャマン服のリボンを腸で、オラン・ホルマイ<sup>(2)</sup>は、腹膜で作った。腹の皮で太鼓を張り、一番長い肋骨は、太鼓の撥にした。「9のスプ」<sup>(3)</sup>で、太鼓の下の取っ手につける9つの輪を作った。心臓で、ジルヘン・トリ<sup>(4)</sup>（中心的な銅鏡）を、肝臓は銅鏡となり、肺臓で悪霊を払う鏡を作り、胃袋は腰に巻いた銅鏡の中でなかでもっとも大きな鏡となった。体の各部分に対応した道具を作ったのである

体の部位	作った道具
頭蓋骨	帽子
髪の毛	帽子のリボン
眉	目を隠す房飾り
腸	シャマン服のリボン
腹膜	オラン・ホルマイ（赤いエプロン）
胸骨	太鼓の輪
腹の皮	太鼓の皮

(1) 天神をホルチン地方でこのように呼ぶことがよく見られる。

(2) オラン・ホルマイはシャマン服を構成する部分。

(3) 体の9つの窪んだ部分（9穴）。

(4) ジルヘン・トリ、直訳すれば、心臓鏡で、シャマンの身体を悪霊から守る中心的な鏡、シャマンの心臓を守護する鏡などと言われる。



長い肋骨	太鼓の撥
9 スプ	太鼓の把手の9つの輪
心臓	ジルヘン・トリ (心臓たる銅鏡)
肝臓	銅鏡
肺臓	悪霊払いの銅鏡
胃袋	腰に巻く一番大きな銅鏡

弟が義理の姉を誤って死させたことによって、二人は反省し、テングリからの賜物として「シャマン」となる。そして、妻の遺体でシャマンの重要な象徴となる装束と道具を作り、その体が別の形で生き続けることになる。この伝説の兄弟猟師の名前をみると、弟の名前のガルブはチベット語である。また、妻を弟に殺されたことをきっかけに、猟師として動物の命を多く奪ったことへの反省が行われた。これは、明らかに仏教の影響である。あらゆる命があるものを大切にし、それを殺害・食用しないのは、仏教の基本的な教えである。二人の兄弟、許しを請うたのは仏教の仏ではなく、シャマニズムの最高神のテングリである。テングリがシャマンに力を与えたというモチーフは、シャマンの出自を天に求め、テングリを崇めることを意味する。また、人間の体を使って、シャマンの装束や道具を作るという発想は、仏教の影響によるものではないかと思われる。チベット仏教で、動物の骨のほか、死んだラマや一般人の頭蓋骨でダムル（振り太鼓）や数珠、足の骨で数珠や仏具などを作ることがあり、そこに聖なる力が宿っていると重要視する。高僧の骨は特にそうである。ホルチン地方では、昔仏教の寺や仏教に影響されたシャマンたちがこのようにして作った仏具を用いた。現在も、当時のものを受け継ぐシャマンがいる。

この伝説を SB シャマンは、弟子たちにも伝えている。ホルチン左翼後旗に住む二人の男性弟子にそれぞれインタビューを行ったところ、上述の伝説を語ってくれた。しかも、それぞれの妻もこの伝説をよく知っていた。すなわち、シャマンの家をよく訪れる人々は、シャマンが師匠シャマンや守護霊に伝授された知識をある程度共有している。



(図1 2007年8月)

→ シャマン帽のリボン

→ 太鼓

→ 銅鏡

→ シャマン服の短い  
ボン

→ シャマン服の長い  
ボン



(図2)

→ 目を隠す房飾り

(シャマンは太鼓を叩きながら弟子の守護霊を早く憑依させようと呪文を含んだ酒を吹きかけているところ、2007年9月)

## 2) 穴がついた片面太鼓の由来

HGZ<sup>(1)</sup> シャマンの語った伝説は以下のとおりである。

太鼓は、ホブグタイ・シャマンのフルグ(乗馬)で、太鼓に乗ると、天に昇り、地下に降り、宇宙

(1) 1928年生まれ、女性、牧民兼農民。亡き義理の父親を継承してシャマンとなった。

三界を自由に行き来した。ボルハン・バッシ（仏様）<sup>(1)</sup>がホブグタイ・シャマンの活動を禁止しようと、ホブグタイ・シャマンと何回にもわたって呪力の勝負を行ったが、ホブグタイ・シャマンがいつもボルハン・バッシに勝った。ある日、ボルハン・バッシが、呪力でいつもホブグタイ・シャマンに負けるため、今回は白雪山に行って最後の闘いをしようと申し出た。ボルハン・バッシが金剛杵に乗って空を飛ぶと、ホブグタイ・シャマンは地上を歩いて白雪山へ向ったが、ボルハン・バッシが白雪山に着いたころ、ホブグタイ・シャマンはすでに到着してボルハン・バッシを待っていた。怒ったボルハン・バッシが、七人の天神に頼んで、茶碗の大きさの石の雨を、七日間降らせた。ホブグタイ・シャマンは、太鼓を頭の上にもち上げると、周りのモンゴル・ゲル<sup>(2)</sup>の広さのところには、石の雹は降らず、その外に落ちた雹はモンゴル・ゲルより高く積もった。ボルハン・バッシは、最終の勝負で負けたことを認め、「今後、君を負かそうとしないので、シャマンとして自由に活動しなさい」と言った。その後、ホブグタイ・シャマンは以前と同じように活動したという。

上に挙げた伝説から分かるように、ホブグタイ・シャマンとボルハン・バッシとの勝負で、ホブグタイ・シャマンの太鼓が決定的な機能を果たしている。太鼓の力で、ボルハン・バッシの降らせた石の雹の被害を受けずに済んだ。伝説で、石の雹を降らせることが出来なかった広さを語る際に、モンゴル人の従来の住居のモンゴル・ゲルの広さに喩えている。現在、農耕化され、土やレンガ作りの家屋に住み、定住生活を送るホルチン人には、このような喩え方が出てこない可能性が十分ある。しかし、伝説は、まだ、モンゴル・ゲルに住んでいたところに作られたことが排除できない。その喩えが、口承伝承の中で、生き続けている。

次に挙げる伝説は、2006年と2007年に2回ホルチン左翼中旗在住の女性シャマンのBMD<sup>(3)</sup>にインタビューを行った際に、語ってくれた伝説である。BMDシャマンは、この伝説を親戚のベヘジャ(1926-)という名のシャマンから聞いた。ベヘジャ・シャマンは生前、ホルチン左翼中旗ドンダ・マンジヨナル村の在住者で、18歳でシャマンになった。没年は不明である。この伝説は、ホルチン地方に広く伝わっている。

当時、ホルチン地方の田舎では知識人や医者が少なかった。弥勒・ボグダがホブグタイの父親のナランチョゴラに民衆のために功德を施すよう方術を教え、ナランチョゴラは、息を引き取る前に、一人息子のホブグタイに弥勒・ボグダから教わったすべての方術を伝授した。ホブグタイは方術をもって民衆のために努め、徳を積む一方、民衆に好ましくないこともしてしまった。そこで、弥勒・ボグ

<sup>(1)</sup> 16世紀後半から、当時のアルタン・ハン（在位1551～82）が仏教で、モンゴル人の統一を計り、チベット仏教を取り入れ、シャマニズムを弾圧し、仏教を普及させた。したがって、シャマニズムと仏教の衝突が生じ、ホルチン地方では、仏とシャマンの勝負を語る伝説が今もよく語られている。

<sup>(2)</sup> “モンゴル・ゲル”とは「モンゴルの家」の意味。遊牧民に特有の住居である。フェルトのできたモンゴル人の昔からの住居。

<sup>(3)</sup> 女性、ホルチン左翼中旗在住、1968年生まれ、農民。

ダは衣装がぼろぼろで、物乞いと思われる姿で現れ、罰としてホブグタイの力を弱めようとした。ホブグタイが太鼓に乗って、テングリ（天）に昇ると、弥勒・ボグダは金剛杵をホブグタイに向かって投げると、両面太鼓に当たり、破られたので、ホブグタイは空から落ちた。落ちる際に、ホブグタイは弥勒・ボグダに負けないよう必死に戦った。最後に北側のアガル・サンダン（檀）樹に落ちてしまい、一枚の赤エプロンが4つに裂けた。アラグ・デールの64本あったネクタイのようなりボンが破られて長いのが24本、短いのが24本、合計48本が残った。また、ホブグタイが腰に巻いていた13個の銅鏡は9個残った。こうして、両面太鼓は穴が開けた片面太鼓となり、シャマンの服は長短合わせて、48本のりボンをぶら下げたようになり、赤エプロンは4枚、銅鏡が9個になった。

BMD シャマンはここまで語り、「ホブグタイ・シャマンは、傲慢であまりに酷いことをしたに違いない。さもないければ、仏がホブグタイをそのようにひどい目に遭わすとは考えられない」と言った。このように、ホルチン地方では、現在においても、仏はシャマンより慈悲深いと考えられていることが分かる。

この物語で、興味深いところは、ホブグタイ・シャマンの方術が仏である弥勒・ボグダに由来する点と、ホブグタイは仏でなく、シャマンとして認識されることである。これは、ホルチン地方で仏教の寺が造営され、多くの若い男性がそこでラマになり、経典を習い、知識人になるという社会風景が、ホブグタイの持つ方術が仏に伝授されたと語ることの背景を作ったと考えられる。一見、シャマンの装束の変容を示すために語られているように見えるが、あくまでもシャマンと仏の勝負をモチーフにしている。結果は、シャマンが負けたが、シャマンは消滅しなかった<sup>(1)</sup>。

異伝が多くあるが、戦いの場は、白雪山である。ホブグタイが、シャマンのあの世である白雪山に落ちるとするのは、シャマンの再生を象徴する。白雪山は亡きシャマンの霊魂が集合する場所であり、シャマンは、守護霊である亡きシャマンの霊を体に憑依させるために招請する際に、白雪山から招き呼ぶ。異伝が多くあるにもかかわらず、ホブグタイ・シャマンは最終的に全部白雪山に落ちるとするのは、すなわちホブグタイの再生もまた、シャマニズムの復活への願いが込められていると筆者は考えている。

太鼓は、ある意味で、ホブグタイ・シャマンの強さの源泉で、それによって、地に入り、天に昇る

---

<sup>(1)</sup> UJH（男性、1932年生まれ、農民、ジャロード旗在住）ホンダン・シャマン（ホルチン地方のシャマンの一種で、天の甥と信仰される）が語った伝説（本論では、内容を省略）は、基本的にBMDの語った伝説と同じだが、ただ一箇所、異なる。すなわち、ホブグタイ・シャマンのシャマン服が最初からりボン状のものでなく、仏に打たれて、白雪山の檀の樹に落ちるとき、樹の枝で破れてりボン状になり、それ以来、シャマン服はりボン状になったと語ったという点である。

ことができた。仏や弥勒・ボグダに負かされた理由は、太鼓が金剛杵で打たれて破ったことにある。また、ホブグタイ・シャマンの太鼓が仏に打たれて破れ、それが現在の穴がある太鼓の由来であると語ることは、ある意味で、仏教とシャマニズムの衝突とシャマンへの弾圧を象徴している。また、シャマンたちにとっては、仏教に順応し、仏教の影響を受けざるを得なかったことの伝承上の表出として考えられる。

この伝説は、ホルチン地方のシャマンの装束や道具の現在の形状の由来を語る伝説であるが、物語の発端に視点を向けてみるとまた別の面白みがある。上述した伝説は、弥勒・ボグダに伝授された方術を、ホブグタイ・シャマンが父親から伝承した後に、能力に驕り、高慢だったため、力を弥勒・ボグダによって、弱められた。この伝説に類似したモチーフが、ブリヤート、ヤクート（サハ）人にも見られる。ともに「最初のシャマン」である。ブリヤートの「最初のシャマン」の「ハラ・ギルゲン（Khara Gyrgän）」は、己れの力は無限なりと宣言したため、＜中略＞大神はその力を削減した。また、ヤクートの「最初のシャマン」は至高神の力を認めようとしなかったため、大神は、火を降ろして彼を焼いたのである[エリアーデ 1974:90]。少なくとも、ブリヤートの最初のシャマンは、大神によって、その能力を賜っている。それを受け取った後、傲慢な態度のため同じく大神によって、力を弱められた。ホルチン地方で、ホブグタイ・シャマンの父親のナランチョゴラが仏の弥勒・ボグダに方術を伝授されたと語るのは、仏教の影響である。ジャロード旗の故エルデニオソル・シャマン（オリヤンハン・アイマグ（部）の出身者）の一人娘のセリツマ（1944年生まれ、農民）の話によると、オリヤンハン・アイマグの先祖が昔、太鼓に乗ると、テングリ（天界）に昇り、「テングリ・ドーダホ」<sup>(1)</sup>する力があつた。その力に驕ったため、テングリ（天神）が怒って、太鼓を打破り、テングリに昇ることができなくなった。天に昇ることは、シャマンにとって、その力を示す最も重要なしるしだったことが伺える。セリツマは、太鼓は、先祖の魂の乗り物である。テングリに昇ったのは、先祖本人ではなく、魂だと認識し、その魂にテングリを招き呼ぶ力があつたと考えている。これらの事例の共通点は傲慢な態度である。それが、結局能力の衰弱へとつながる。

1930年代に、ウノ・ハルヴァが、「シベリアのシャマンは、シャマンする時、装束のほかに太鼓も用いるが、これは巫具としては装束よりも明らかにもっと古く、さらにいくつかの民族においては、装束が用いられなくなった後も引き続き極めて重要な役割を演じている」[ウノ・ハルヴァ 1971:467]と述べる。ウノ・ハルヴァは、①太鼓はシャマンの装束より古く、②装束を着用しなくても太鼓は依然として作られる、という情報を伝達している。この記述を現在のホルチン地方のシャマニズムと照合すると同じ現象が見受けられる。シャマン服を持たないが太鼓をもつシャマンがいる。太鼓は、守護霊を招請するに当たって重要な役を演じるからである。弟子入りして、師匠の家で見習う段階で、師匠シャマンから受け継ぐ、あるいは、自分で作る、家族、親戚に調達してもらう。

(1) 天神を呼び、雷を落とすことを指す。マルコ・ポーロ、ウィリアム・ルブルクにも出てくる。

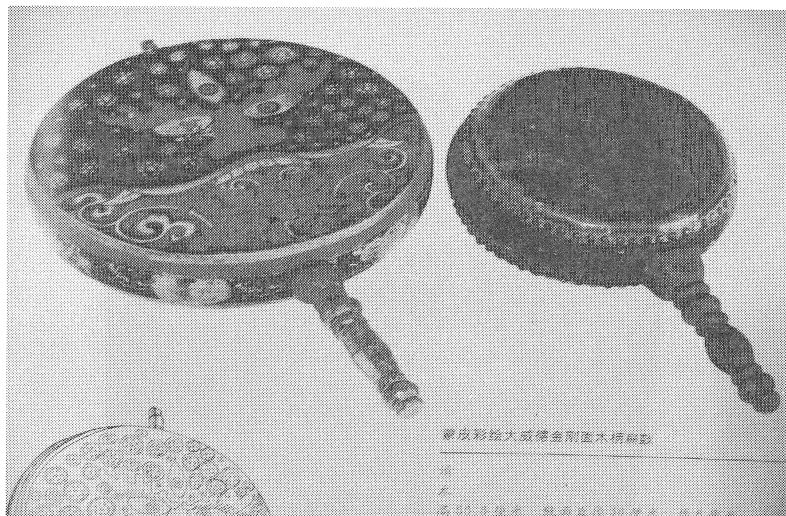
上述したように、ホブグタイ・シャマンが仏との勝負で、両面太鼓が仏の金剛杵で打たれて破れ、それ以来、穴のある片面太鼓となった。現在のホルチン地方のシャマンは伝説のとおり、穴が開いた片面革貼りの太鼓を使うのがほとんどである。仏教がホルチン地方に浸透する前に、シャマンが両面太鼓を使っていたかということは、考える必要がある。モンゴル国のシャマニズムを調査したオ・プルブは太鼓について、次のように述べる。「モンゴル・シャマンの太鼓は、片面に皮が張られている点で、トヴァ、ブリヤート、およびシベリアの諸民族のシャマン太鼓と類似する。なぜ片面太鼓かについて黒と黄色<sup>(1)</sup>のシャマンは各自別々の解釈を持っている」[オ・プルブ 2006: 284]。オ・プルブは、続いて、黄色シャマンの解釈が、ホルチン地方のホブグタイと仏との勝負に由来することを紹介し、黒いシャマンの解釈を次のように述べる。「オンゴット(守護霊)は太鼓に乗ってアサル(守護霊の居場所)からアサルへ、家から家へ、そして、天界、あるいは地上を飛翔する際に、太鼓の内側に位置する。すなわち、太鼓の内側は、守護霊の居場所なので、守護霊が自由に出入するためのドアになるため、シャマンの太鼓の片方にしか皮が張られていないと考えられる。これから見ると、モンゴル・シャマンは、もともと片面太鼓を用いることを示し、さらに、モンゴル・シャマニズムのオンゴン・セフス(守護霊)に対する一種の考え方を表現している」[オ・プルブ 2006: 284-5]。ニオラツエ、ウノ・ハルヴァ、ミハイ・ホップールが、それぞれの本の中で紹介するシベリアの諸民族の太鼓を見ると、みな片面太鼓である。今日のホルチン地方のそれと大に異なるところは、太鼓の杵が木製で、幅が広く、世界観が描かれていることである。また、太鼓の裏側に取っ手がある。これらを考えると、オ・プルブの指摘した、もともと片面太鼓だったという説に筆者も賛成する。すなわち、ホルチン地方を含めたモンゴルのシャマン太鼓は、もともと片面太鼓である。ホブグタイと仏の勝負で、シャマンの太鼓は、本来は両面だったと語るのは、仏教の影響によるものだと考える。仏教寺院でラマが使われる太鼓が両面太鼓のため、当時社会的地位が高かったラマそれにあやかっただけで、シャマン太鼓ももともと両面だったと語られていることである。

ホブグタイ・シャマンと仏との勝負の伝説で、ホブグタイ・シャマンの持つ太鼓は、しばしば「ビテグ・ハラ・ヘンゲルゲ」(閉じられた黒い太鼓)、あるいは、「ビテグ・オラン・ヘンゲルゲ」(閉じられた赤い太鼓)と語られる。すなわち、両面太鼓を指し、その色が黒、あるいは赤である。なぜ、黒か赤で登場するのだろうか。『蒙古民族文物図典—蒙古民族宗教文化』に、仏具として紹介された太鼓の種類をまず紹介しよう。①ダムル(振り太鼓)、②デンデン太鼓、③2匹の龍が珠で遊ぶ絵が描かれ、牛皮が張られた扁形太鼓(高さ28cm、直径50.5cm、図4)、④木製の取っ手が直角についた扁形太鼓(高さ55.5cm、直径36cm、厚さ8cm、図3)、この太鼓の面に黒と赤が中心で、黒色が混じった金剛(仏)の絵が描かれているものがある。すなわち、形は同じだが、太鼓の色と絵柄が異なっている。同書にまた、これより大きな同じ形の太鼓を持つラマの写真が載せられている。その太鼓の

(1) 仏教に順応しなかったのは黒で、順応したのは黄色と見なす。

枠（横）は赤であるが、面は皮本来の色である。中央に色とりどりの渦巻きが描かれている。寺院で用いられた太鼓が赤か黒に染められていた故に、ホブグタイ・シャマンの太鼓が時に黒、時に赤と語られたのではないかとされる。

(図 3)



(図 4)

(図 5 鳥居きみ子の著書における原タイトル：シャーマン巫人の装束及太鼓)



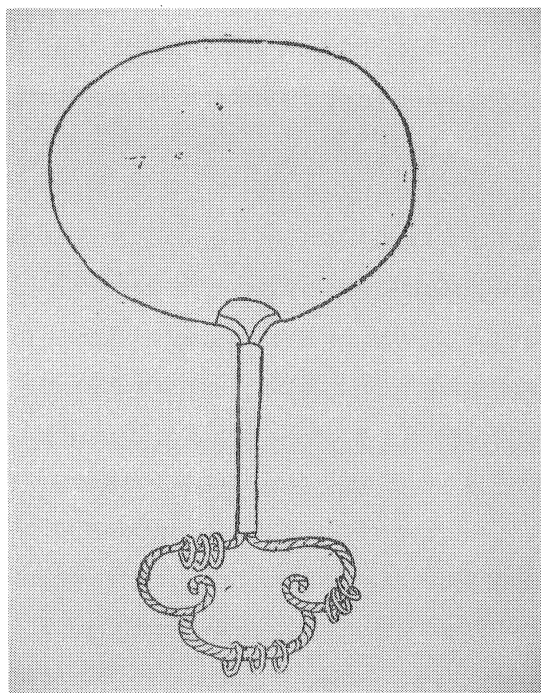


1950年代まで、「ホルチン地方では、師匠シャマンが白い太鼓、弟子シャマンが赤い太鼓を持っていた」「フルレシャ、白翠英 1998: 83、228」。すなわち、師匠と弟子の持つ太鼓の色が異なる。1907年に、西ジャロードでシャマンの行事を実見した鳥居龍蔵と鳥居きみ子も同じ情報を伝える。「而して巫女の持てる太鼓の表面は、皮の色の白色のものなれども、弟子の持てる方は、特に赤色を以て之に塗れり。其の

形状は我が国日蓮宗のものと稍相似たり」「鳥居龍蔵 1975: 192」。当時の太鼓の写真と絵を鳥居きみ子は『土俗学上より観たる蒙古』に付している(図5参照)。



(図 6 太鼓の図)



今日のホルチン地方で使われている太鼓とほとんど同じである。師匠が白い太鼓を使うのは、モンゴル語に「熟練した」あるいは、「達人」を表現する「チャガラッサン」と言う語があり、語根は「白い」を指す「チャガン」である。すなわち、白色でモンゴル人は、「上達」や「熟練」という意味を表現しているのであろう。弟子が赤い太鼓を使うのは、赤色で弟子を表現しているからである。「オラン・ニルハ」と言えば、「赤子」を意味する。赤色を意味する「オラン」という語で、「未熟、幼稚、不慣れ」という意味でも使う。守護霊がシャマンに憑依して会衆に語りかける際に、いつも口にする言葉は、「オラン・ニルハ」である。それは、守護霊から見れば、現場にいる老いも若きもすべて年下である。そのため、親愛

の情を込めてこのように呼んでいるのである。現在、色で、師匠と弟子の持つ太鼓を区別することがなくなった。師匠シャマンが専用の太鼓を持つ場合があるが、デザインと色が弟子と変わらない。

シャマンは太鼓を自分の乗馬とみなす。シャマンは、太鼓を叩きながら神歌を歌って精霊を招き、トランスの状態に入る。SRQ<sup>(1)</sup> シャマンによると、神歌を歌い、太鼓を叩き、守護霊を興奮させたり、感動させたりして、早く降臨することを促す。神歌と太鼓の音を聞いて降臨してきた守護霊がシャマンの身の回りにうろうろして、なかなか体に入らない場合がある。この際に、助手は太鼓をリズムカルに絶えずに叩きながら歌って、守護霊を興奮させて、早くシャマンの体に入ることを促す。守護霊がシャマンの体に入ると、意識を失ったトランス状態に入ると、シャマンは、筆者に説明した。実際の参与観察でそれを確認した。

## II ホルチン地方のシャマンの太鼓の構造と機能

### 1) ホルチン地方の太鼓の種類

調査した限り、タラ・ヘンゲルゲ（片面太鼓）とダムル（振り太鼓）の二種類がある。次にそれぞれを紹介する。

<sup>(1)</sup> SRQ (1926-2007) シャマン、男性、農民。生前、ホルチン左翼中旗ヨロンモド村南タラ村在住者。

### (1) タラ・ヘンゲルゲ

現在、ホルチン地方で、一般的に使われている太鼓は、片面に皮が張られた太鼓本体と撥からなる。太鼓の枠と柄は鉄製である。モンゴル語で、太鼓を「ヘンゲルゲ」と言うが、片面太鼓と言う意味で、「タラ・ヘンゲルゲ」とも言われる。革が張られた鉄枠と柄からなる片面太鼓である。すなわち、団扇太鼓の形である。基本的に円形であるが、その中に完全な円形の太鼓、その両側を少し引っ張った（左右が少し長い）ような、楕円形太鼓と、上下を引っ張った（上下が少し長い）ような、楕円形という3種類がある（図9、10参照）。太鼓の鉄枠に革を張り、鉄枠と柄のつながったところに小さな穴がある。これはすなわち、ホブグタイ・シャマンの太鼓が仏の金剛杵に打たれて穴が開いたことに由来する。柄の端に①左右楕円形の輪とその下にそれより小さな輪、楕円形の輪に9つ、更なる小さな輪を取り付ける。楕円形の下にある輪に、3つの楕円形の輪につけた同じ大きさのガラガラをつける。3つの輪がある。3つの輪がそれぞれ独立したものもあれば、それぞれの輪にまた3つの小さな鉄環がついている。これが、ガラガラである。すなわち、太鼓の柄の端に取り付けられた鉄製の輪は、仏教の法具である錫杖<sup>(1)</sup>を模っている。これは、ホルチン地方のシャマニズムが仏教の影響を受けたからである。錫杖の形の鉄の輪に鉄線と鉄縄の二種類がある。振り鳴らす太鼓の柄の部分と撥に布が巻かれる。調査した限り、赤、白、黒、緑、黄色などの布が使用されている。撥の先端に色とりどりの布や絹切れを垂らすシャマンもいる。太鼓の柄の端にある3つの輪、あるいは、2つの輪のデザインには、多少バリエーションがあるとはいえ、基本的に蓮の花を模っている。SB シャマンのように、恥骨と解釈するシャマンもいるが、仏教において、蓮の花が女性生殖器を象徴することと関連があると思われ、太鼓の柄に取り付けられている9つの輪のガラガラは、錫杖に取り付けられているガラガラに由来していると考えられる。

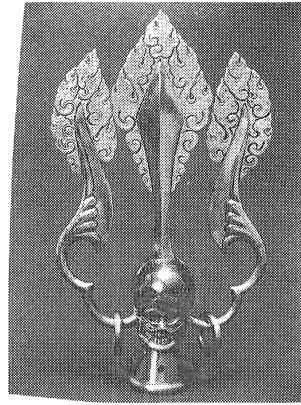
ドイツ在住の内モンゴル・オールドス出身の人類学者レ・ホルチャバートルとその妻チ・ウジムによれば、「オールドス・モンゴル人は、住居の前に必ずくヒーモリ（祈りの旗）>をはためかせる。〈中略〉「ヒーモリ」の原形は蒼きモンゴルの生気を表現する目的で、青い旗に飛翔する馬を描き、スウルド（旗）の棒に旗として取り付け、祭祀していたと民衆の中で伝承されている。〈中略〉チベット仏教がモンゴルに浸透してからこのスウルドに変化が生じた。具体的に見れば、旗の棒の槍状の先端をチベット式の三叉に変え、その上に日と月を彫刻した。この形状を土地の人々は、弓矢の形とも言う」[レ・ホルチャバートル、チ・ウジム 1991：83-86]。レ・ホルチャバートルらの指摘する先端が三叉になっているヒーモリの槍の下部には、環がつけられている。昔は、寺院では、セレー（槍）と呼ばれる三叉の装飾器があり、その下部に環が取り付けられる。すなわち、もともと槍状だったス

(1) 一般に、錫杖の音には僧が山野遊行の際、禽獣や毒蛇の害から身を守る効果があり、托鉢の際に門前で来意を告げる事にも使われる。教義的には煩惱を除去し智慧を得る効果があるとされる。

ウルドの先端を仏教の法具の三叉に変える際に、そこに取り付けられた輪も導入したのである。同じくオルドス地方出身の人類学者の楊海英は、「キー・モリ（ヒーモリー筆者注）は、三叉の形をした鉄器にウマの鬣を飾ったものである」[楊海英 2003:66]とその形を紹介する。

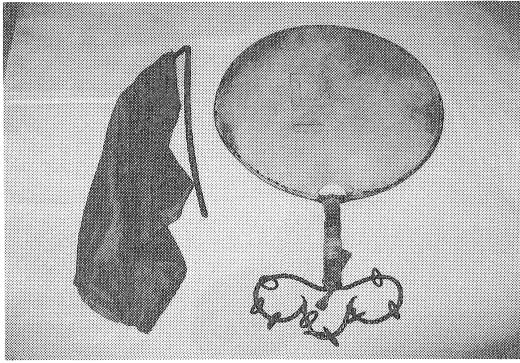


ている。

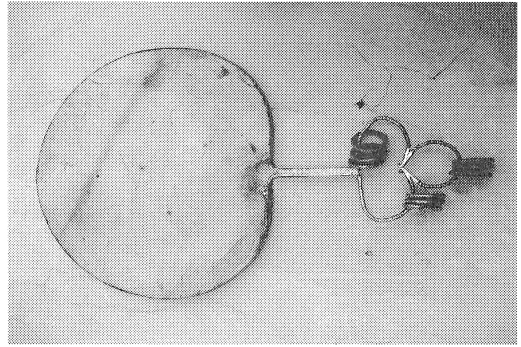


(左図7 錫杖を手にする16羅漢の1人、18世紀、岩絵具、布65×49cm、モンゴル国立美術館蔵。上図8 寺院の装飾器セレー(槍一筆者注)、20世紀、銀、20×12cm、モンゴル国立美術館蔵)「蓮見治雄監修1996:113、44)」。槍の下部は蓮の花を模っ

ホルチン地方の太鼓と類似した太鼓を清朝の時代の満洲族も使った。遼寧省丹東市文化局の研究員劉桂騰の分類によれば、①遼寧省東部式、②遼寧省西部式、③京畿式である[劉桂騰 1999:70]。満洲族の団扇太鼓には穴が開いていない。これは、モンゴルのほど、仏教とシャマニズムの衝突が生じなかったためだと考えている。満洲族のこの柄が錫杖式の団扇片面太鼓には、穴が開いていない。中国の北方民族のエベエンキー、ダフル、オロチョン、ホジェン、一部の満洲およびシベ族は、依然として柄がなく、裏に革紐がとりつけた太鼓を使っており穴がなく[郭淑雲、王宏剛主編 2001 参照]、把むところは太鼓の背面に取り付けられた革紐である。これは、仏教の影響が薄いからだろうと筆者は思う



(図9 逆さ卍が描かれた円形の太鼓と撥)



(図10 左右が少し長い楕円形太鼓)

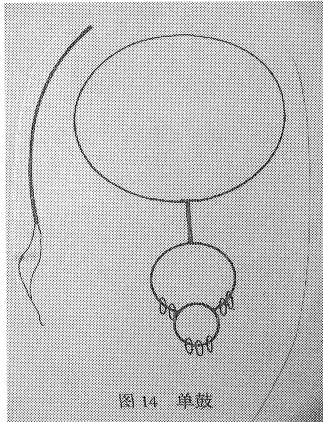
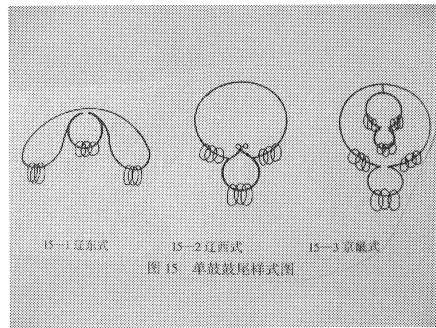


图 14 单鼓

(図11 満洲族の片面太鼓)



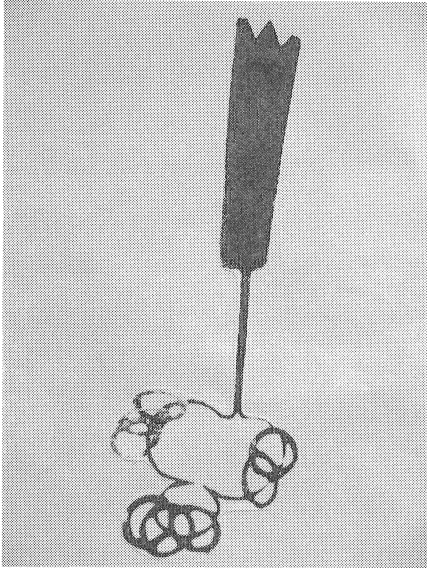
15-1 辽东式 15-2 辽西式 15-3 京畿式  
图 15 单鼓鼓尾样式图

(図12 左側は遼東式、真中は遼西式、右側は京畿式で

ある。劉桂騰は、遼東式を「半蓮の花形」と、遼西と京畿式を「蓮の花形」と解釈する)

内モンゴル博物館で、中国語で「三尖状鉄法器」と称して、モンゴル帝国時代のもつと見られるシャマン道具を展示している。長さ105.5cm、幅25cmである。「長いシャベル形で、前端は3本の歯のような形状を示し、柄の先端に、如意雲の紋様の輪で、そこに8つの鉄の環を取り付けている。モンゴル・シャマンが儀式を行う際に手にする呪具である。これまで内モンゴルで見つかった、比較的古い時期のモンゴル・シャマンの呪具である」[鉄達、慶巴図 2008:56]。「三尖状鉄法器」(図13参照)の柄につけている環が8つあるが、もともとは9つだった可能性を排除できない。なぜなら、他は、3つで一組になっており、また、モンゴルのシャマニズムにおいて、奇数が重んじられることを考えても9つあった可能性がある。「三尖状鉄法器」を紹介する理由は、「如意雲の紋様」と紹介している柄のデザインが、今日のホルチン地方の太鼓の、柄のデザインとともに、仏教の錫杖を模ってい

るからである。筆者は、錫杖の原形は蓮の花と思っている。仏教に多く使われる蓮の花を模っている。この道具の具体的な機能は不明だが、先端が三角で、歯のようにになっていることから、悪霊を追い払う目的で使われていたのではないかとと思われる。



(図 13 ←三尖状鉄法器)

ホルチン地方では、太鼓につけられている輪のガラガラには太鼓の音を高める効果がある。シャマンは、守護霊を招請する際に、太鼓を叩きながら神歌を歌う。太鼓の音と銅鏡が触れ合う音、シャマンの歌声を聞きつけた守護霊が降臨すると考えられている。BMD シャマンによると、太鼓につけられたガラガラの音を悪霊が嫌がって、近づかない。すなわち、ガラガラの発する音が、ホルチン地方のシャマニズムの世界では、悪霊退散に一役買うとみなされている。

太鼓の撥をホルチン地方で、ジェシゴル、ドヒゴル、あるいは、タシゴル<sup>(1)</sup>などで表現する。太鼓の撥は鹿やヤギの角、御柳の枝、竹で作る。現在は、竹製が多く見られる。御柳で作ることについて、NSMH<sup>(2)</sup> シャマンは、御柳は、ダロラガ（悪霊を鎮めるもの）であるという。御柳の色が棗色であることから、ホルチン地方では、生命、あるいは、生血の象徴と考えられ、そこに聖なる霊的な力が宿ると信仰される。太鼓の柄の部分と撥には、布が巻かれ、調査した限り、赤、白、黒、緑、黄色などの布が使用される。撥の先端に色とりどりの布や絹切れを垂らすシャマンもいる。

MNH<sup>(3)</sup> シャマンによれば、太鼓の柄の3つのガラハ（環）は、宇宙3界を象徴する。3×3合計、9個の小さな環が、「9つのダバー」（9つの山<sup>(4)</sup>）を象徴し、9つの環×9、合計81は、9つの山を通る際に、1つのダバーを9回繰り返し行い、合計81回を行うことを意味する。昔は、9つの山を通ろうとするシャマンは、自分の守護霊（亡きシャマン）の墓の前で100日間、「ガラハ・イン・タルニ」（環の呪文）を習得する。すなわち、悪霊を鎮めるための呪文である。それは、タンガルグ、すなわち、シャマンを助けるという約束の呪文になる。太鼓の柄の先端の取り付けの9個のガラガラの呪文

(1) タシゴルという語は、鞭を表す。

(2) 1927年生まれ、世襲型シャマン、農民、ホルチン左翼中旗在住。

(3) ホルチン左翼後旗在住。男性、年金暮らし。世襲型シャマン。

(4) 「9つのダバー」とは、ホルチン地方では、1950年代までは、シャマンの入巫儀礼、すなわち、イニシエーション儀礼の際に、行われるシャマンの能力の試験である。9つの種類がある。「ダバー」とは、山、難関、峠を意味する。すなわち難関を乗り越えることを意味する。

を作って、太鼓を叩くと、いかなる悪霊をも退治することができると MNH シヤマンが語った。

通遼市<sup>(1)</sup>の芸術研究所の白翠英らが、1984年にボヤンヘシグ・シヤマン(1918-1985)をインタビューした際、彼は、太鼓について次のように紹介した。「我が家が、15代受け継いできたヤギの革でできた太鼓は、大小二種類がある。大きい方は守護霊を招請する際に使われる。クライアントが招きに来ると、壁にかけてある太鼓が自然に鳴る。10あまりある小さい太鼓は遊芸に使われ、上に、蓮の花、八卦、西瓜、吉祥模様が描かれている」[白翠英 1998:228]という。現地では、太鼓が自ら鳴るということは、太鼓に潜む守護霊が音で、来客を知らせていることとして考えている。現在、ホルチン地方では、シヤマンの太鼓の表面に絵が描かれていることは稀である。これまで、筆者は、絵の描かれた太鼓の一つしか実見していない。その太鼓の現在の持ち主は、BMDシヤマンで、親戚のプヘジャ・シヤマンから譲ってもらったという。作られて少なくとも200年経っているとされ、模様は赤色の逆さ卍である。もちろん、新参シヤマンが増加しつつあるホルチン地方では、絵が施された新調の太鼓が出てくる可能性は十分ある。先学の記述と筆者の見た太鼓の絵を見ると、そこに仏教、道教、漢民族の農耕の影響がはっきり表れている。蓮の花と卍は仏教、八卦は道教、そして西瓜はホルチン地方に漢民族が移住してから、ホルチン人が庭や畑で栽培し始めたことから影響を受けたと推測される。また、引用の中で、あったように、シヤマンを招きに来たときに、太鼓が自ら鳴るということは、太鼓に潜む主、すなわち太鼓の守護霊、または、シヤマンの守護霊がこれを知らせていることとして、現地で認識される。

太鼓の杵を「チャガリグ」と称するが、太鼓そのものを意味することがある。シヤマンの神歌の中で、自らを「チャガリット」(チャガリグ(太鼓)を有するもの、又は、チャガリグ(太鼓)であるもの)と称し、表現する場合がある。シヤマンが、「チャガリット」と自称するのは、太鼓は、シヤマンに欠かせない道具で、シヤマンの重要なアイデンティティであるため、太鼓で自分を象徴しているのである。

次に、筆者が調査したホルチン地方の片面太鼓の一部の大きさを表にすると以下のようである。単位はcmである。

名前	太鼓の全長	杵の幅	杵の上下の長さ	柄の長さ	撥
SH	61	40	39	32	42
PSG	66.2	36.8	44	32.2	40
BMD	52.5	31.5	30.5	22	45.5

<sup>(1)</sup> 内モンゴル通遼市で、ホルチン地方の最大都市である。

博物館に所蔵シャマン太鼓の大きさ (cm)

博物館名	年代	形状	太鼓の全長	枠の幅	枠の上下の長さ
内モンゴル大学民族博物館	清	円	68	33	33 強
ホルチン (通遼) 博物館	近代	楕円	55.5	27.5	33.4

[鉄達、慶巴図 2008 : 58-59]より作成。

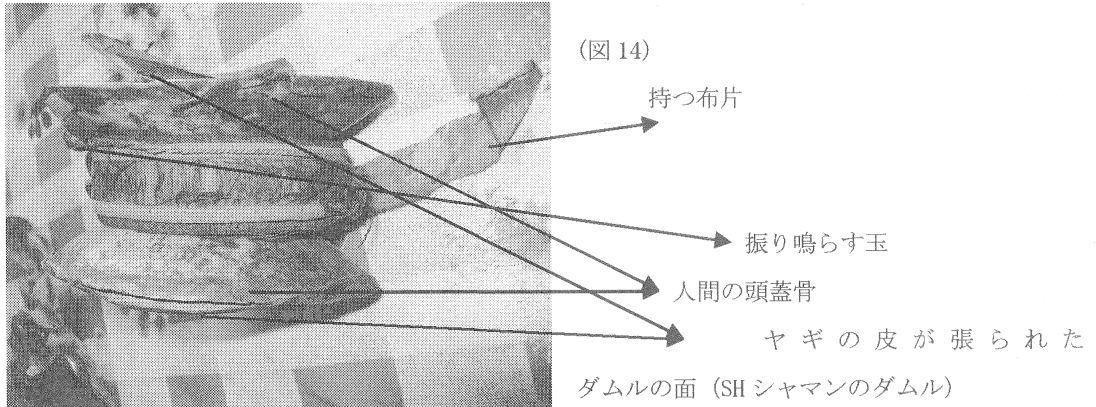
## (2) ダムル (振り太鼓)

すでに述べたように、現在、ホルチン地方で、シャマンたちが一般的に使っているのは、片面太鼓である。一方、ダムルと呼ばれる両面太鼓を用いるシャマンもいる。

SH<sup>(1)</sup> シャマンにダムルという振り太鼓がある。ダムルは、明らかにチベット仏教がモンゴルに弘まることによって、入ってきたものである。寺の仏具であるが、民間では、シャマンが悪霊を追い払う場合、道具として使われることもある。SH シャマンの説明によれば、何代前からかは不明だが、伝承されてきたものである。言い伝えによると、二つの頭蓋骨を持つ人間が亡くなった後、頭蓋骨でダムルを作った。二つの頭蓋骨を持った人間のそれのできたダムルの悪霊を追い払う力が強い。SH シャマンは、また、「フネ・ガブル・イン・ダムル」(人間の頭蓋骨の振り太鼓)と呼んでいる。筆者は、その人が二つの頭蓋骨を持って生まれたことがどのようにして分かるかと質問したところ、近所にそういう人がいれば、シャマンが守護霊の力でそれを知る。そして、亡くなると、頭蓋骨でダムルを作りたいことをその家族に伝える。仏教の影響で、人によっては、遺骨で仏具を作ることを名誉と考えることもある。SH シャマンのダムルの大きさは、両面の直径が、長径は 13.7cm でもう短径は、12.3cm であり、ヤギの皮が張られている。SH シャマンのダムルには、紐で、結んだ玉がついている。持ち上げるための布片がダムルの両面を繋ぐところに取り付けられている。『蒙古民族文物図典—蒙古民族宗教文化』の中では、内モンゴル博物館に所蔵されたダムルを仏具として紹介している。それによれば、持つところが布片になっているのが多いのに対して、木製の柄がついているのは1個だけである。1944年以前に、喜吉設了が現在の赤峰市のアルホルチン旗にあるハン・スム(寺)で行われた法会を観察しており、後に論文の中でその仏具を紹介している。数々の仏具が人骨で製造されていることに言及し、中にダムルも含まれる。それによれば、「ダムロー(すなわちダムル—筆者注)

(1) 男性、ホルチン左翼中旗在住、農民、世襲型シャマン。

は大體人骨を用ひず、適當なる用材を以て造られる事が多い。時には胴を廻つて頭蓋骨<sup>(ママ)</sup>を横てある事もある。皮は山羊が多い。猿皮を用ふるとも云ふ」[喜吉設了 2002 (1944) : 87]とあり、寺院で使用されるダムルに猿の皮を張ることについて、『蒙古民族文物図典—蒙古民族宗教文化』も紹介している。「チベット仏教の密教經典によれば、この太鼓を作るには、16歳の男と12歳の女の子の頭蓋骨を用いる。それに猿の皮を張り、仏事の際に、金剛鈴と一緒に伴奏楽器として使用する。普段は、仏前の小机に載せて供える」[鉄達、慶巴図 2008 : 210]。



## 2) 太鼓の機能

「シャマンが守護霊を招請してトランス状態に入ることは、歌と演奏で、踊りを一体化した総合芸術的な演出である。そこで、太鼓は、演奏を担当する<主演者>である。シャマンは天と地を拝み、守護霊を招き寄せる際に、太鼓を叩く音をメロディにし、ステップを調整し、歌う。また、祭祀、治療儀式を行う」[ジムバ 1998 : 101]。ホルチン地方では、シャマンの太鼓は主に次のような機能をもつ。①シャマンの魂の乗り物。②シャマンの「教科書」。③神歌と太鼓の音で守護霊・補助霊を招請する「ドヒヨ」(メッセージ、信号)。④神歌や太鼓の音で、シャマンがトランス状態に入る。⑤招請してきた補助霊の依り代。⑥悪霊退散。太鼓の音は太鼓に潜む守護霊の音である。⑦ト占。⑧患者に憑く悪霊の正体を太鼓の面に映す。⑧祭壇に祭祀して、守護を受ける。

調査した限り、太鼓なしに神歌を唱えると次の語句を忘れてしまい、出てこなくなる。太鼓を持たないと落ち着かない、曲を演奏しないと歌えないようなものである、と心情を語るシャマンが多い。また、シャマンは太鼓を叩いて上達し、熟練する。ホルチン地方で、シャマンたちの間に次の言い回しが伝承されている。

紙に文字がなく、  
雪に跡がなく、



太鼓を叩くと歌が出てくる。

太鼓を叩いてシャマンが熟練（上達）する。

また、

（太鼓は）経文が書かれていない経典で、  
叩くと経文が頭に入ってくる。

この短い語句から、シャマニズムでは、仏教のように書き残した経典がなく、太鼓を叩くと、覚えた歌が頭の中で浮かんでくる。太鼓を叩いて踊り方、歩き方を覚える。この意味で、太鼓は、特殊な教科書の役割を果たす。太鼓の音は守護霊を招請する役割を果たす一方、悪霊を追い払う機能をも果たす。悪霊が太鼓の音を怖がると思う。シャマンは、病気治療において、自分の守護霊の力だけでは、病因の悪霊を追い払うことができない場合がある。そのため、シャマンはより多くの神霊の力を必要とする。太鼓を叩いて、シャマニズムの神々、補助霊たちを招き寄せる。その際に、降臨してきた神霊たちを太鼓に入らせる。すなわち、太鼓を依り代として用いる。太鼓の代わりに銅鏡もこの機能を果たすことがある。

「太鼓の合図と供物の香りで、守護霊が降臨する」とも言われる。これを見ると、太鼓は、シャマンにとって、楽器の機能を果たし、また太鼓の音が守護霊へのメッセージである。したがって、太鼓の音は、シャマンがトランス状態に入ることを促す。故 SRQ シャマンは、「太鼓を強く打ち続ければ続けるほど、降臨してきたものの、まだシャマンの身の回りをうろうろしている守護霊をさらに興奮させ、シャマンの体に入ることを促す」と語った。太鼓の音の昂奮促進作用は、シャマンに対してではなく、シャマンの守護霊に対して効果があると考えられている。上述したホブグタイ・シャマンと仏との勝負の伝説でも出てきたように、シャマンは、太鼓を自分たちのフルグ（乗り物）と見なす。この伝説から少し離れて考えると、現実の世界で、シャマンは太鼓に乗って宙を飛翔するのではなく、シャマンの霊魂、あるいは、シャマンに憑いている守護霊が乗り物とするのである。また、シャマンが、太鼓をフルグと称するのは、ただ乗り物と考えるから、このように呼ぶようになったのではない。シャマンは、太鼓を叩いて、神歌を歌い、太鼓を介して、守護霊を呼び寄せる。この意味で、太鼓は、シャマンの仲介者の役をも果たす。シャマンはクライアントの依頼を受けて、撥を投げて占いを行うことがある。見習い中の AMRBY<sup>(1)</sup> シャマンは、トランス状態で、薬指で太鼓に文字を書く振る舞いをした。後から訊いたところ、降臨してきた守護霊が呪文を書いて太鼓に入れたと説明してくれた。それによって、太鼓の聖なる力が増すという。弟子シャマンは、太鼓を叩き、神歌を歌って、守護霊

(1) ホルチン左翼後旗在住。男性、農民、1970年生まれ。非世襲型シャマン。

を体に入れるためそれを招請する。一人のシャマンが複数の守護霊の後継者になっているため、招請しなかった別の守護霊が憑依しようとする。その際に、師匠シャマンは太鼓を上下に振って、望ましくない守護霊を外に追い出す。

### Ⅲ 現代のシャマンたちと太鼓

#### 1) シャマンの太鼓作り

今日、ホルチン地方で、シャマニズムが復活しつつある中で、太鼓の杵と柄を鍛冶屋に作ってもらいながら、自宅で作る場合もある。また、近年、太鼓の杵と柄を副業として製造する職人が現れている。代金は2007年の時点では、50元（約850円）である。

ホルチン地方では、祭天儀礼でテングリ（天神）に捧げた供犠羊やヤギの革で太鼓を作る。羊の革よりヤギの革のほうは音が良い。なぜ、テングリに捧げたヤギの皮で作るのか。テングリに供犠を捧げる目的の一つは、試食させて喜ばせるためである。祭天儀礼で、テングリに供犠を丸ごと捧げるという意味で、供犠肉、皮、内臓、供犠を洗うために使われた水、胃袋、腸の内容物まで、すべて捧げる。祭壇に乗せられた供犠肉の湯気が消えるまで、そのままにしておく。テングリは、湯気を通して、供犠を受け取ると考え、テングリが供犠肉を試食しているとみなす。テングリが受け取った後、供犠肉をテングリの恵みとして、集まったみなが共食する。同じく、テングリの恵みとしての供犠ヤギの皮にテングリの聖なる力が入っていると貴重視する。モンゴル国の「ダルハード、ホーラル部のシャマンは、太鼓の杵を作る木材を朝日に照らされる場所に生えた樹、または、雷に打たれた樹で作ることがめでたいとみなされる」[オ・プルブ 2006:292]。雷に打たれた樹が重要視されることは、雷をモンゴル人は、「チャヒルガン・テングリ」（稲妻天神）と信仰し、雷が落ちた樹に稲妻天神の聖なる力が入ったと考えるからである。それでできた太鼓は、稲妻天神の力が入った貴重な道具とみなし、そこに悪霊が追い払う聖なる力が潜んでいると考える。

シャマンのBMDによると、鹿の革でできた太鼓の音が一番良いと言う。これ以外、狂犬の革で作る場合もある。音を重視するより、狂犬の異常な力を利用するためである。狂犬は非常に恐ろしい存在である。狂犬というだけで、恐怖感を抱く。したがって、狂犬の皮で太鼓を作ることは、悪霊を近づかせず、退散させるという意味が込められている。MNHシャマンによれば、太鼓を作るには、狼の革、しかも生きて剥いた皮で作るのが一番良い。MNHシャマンの語りでは、生きながら剥いた狼の皮で作った太鼓の力は異常に強いと伝えられている。狼は、モンゴル草原で、動物や家畜をもっとも被害に遭わせる存在であり、誰も見ても恐怖感を抱く。生きて剥いた皮を剥ぐのは、狼の野生や習性がそこに宿っているので、その力を太鼓に宿らせるためだと考えられている。それが結局、悪霊を退治する力になるのである。

SRシャマンが口を開いて<sup>(1)</sup>すぐ病気治療を行ったので、師匠シャマンのBMDが守護霊の力が強く、病気治療力が強いため、人々のために役に立つシャマンになることを願い、狂犬の革で作った自分の宝である<sup>(2)</sup>太鼓をSLシャマンに贈った。しかし、その太鼓の革が少し厚かったため、きれいな音が出なかった。SLの夫は、太鼓がきれいな音を出すよう、革をサンドペーパーで摩して薄くした。その後、湿気を取り除くため、日光の下に干したが、あまりに薄くしたため、自然に割れてしまった。このことを受けて、SLシャマンの守護霊が、毎晩、SLやその夫の夢に現れて、太鼓を返せと責めた。SLは自分で太鼓を作ることを決断するが、鞣革の作り方を知らないため、村の老人から教わった。そして、自ら太鼓を作った。ヨロンモドという村では、太鼓の鉄枠を50円で売っているが、自分で作ると20元かからないとSLシャマンは言い、革貼りの太鼓は完成品が100元もするので、自分で作るのが経済的だと考えている。師匠が弟子に太鼓を贈呈することがしばしばある。これもSLが皮の鞣技術を学んだ理由の一つである。太鼓を作る作業を習得中、2片の革を縫い合わせて、太鼓を作った。音はよかったが、弟子には贈らなかつた。縫い合わせたものは縁起が悪いと思ったからである。現在、ホルチン地方で、見習い中の弟子ライチン・シャマンがトランス状態に入ると、守護霊が、その口を通じて、ビテグ・ヘンゲルゲ（両面太鼓）がほしいと要求する場合がある。また、手まねで伝えることもある。2006年9月に筆者が、SRQシャマンの自宅を訪ねたときに出会った事例を挙げてみよう。

見習い中の弟子シャマンのDGL<sup>(3)</sup>は、SRQシャマンの妻の弟の娘である。その守護霊は、SRQシャマンの義理の祖父、すなわち、DGLの父方の曾祖父である。義理の父親は生前ライチン・シャマン<sup>(4)</sup>であった。ライチンとは、仏教に順応した白いシャマンで、しかも道具からトランスのスタイル、治療方法などが仏教の影響を強く受けている。守護霊を招請する際に太鼓の代わりに、チャンを使うことが多い。DGLの生前ライチン・シャマンだった曾祖父である、守護霊が両面太鼓を要求することは、仏教の影響を示している。

SRQシャマンの話によると、妻が50代になった1980年代に、妻の祖父の霊が憑依した。すなわち、現在DGLをシャマンにした霊である。当時は「ビテグ・ヘンゲルゲ」（両面太鼓）を要求されたため、小形のを手作りした。しかし、妻が病弱で、守護霊を体に入れて、トランス状態に入ることが、身体的に耐えられないが故に、守護霊をあまり招請しなかつたという。その妻が1997年に71歳で世を去った。それから7年後の2004年に、義理の祖父が孫娘のDGLを後継者として選んだことが判明した。しかし、DGLは、精神的に受け入れる準備ができていなかったため、2年延期したという。SRQ

(1) シャマンをシャマンにした亡きシャマンの霊がシャマンの体に憑依して、シャマンの口を通じて、自分の生前の経歴、要求、なぜこの人を後継者として選んだかなどを明かすことを言う。

(2) 狂犬の革は現在手に入りにくいいため、非常に貴重視される。また、そこに宿る力への信仰が潜んでいる。

(3) 1970年生まれ、女性、農民。ホルチン左翼中旗在住。

(4) 仏教の影響を受けて出現したホルチン地方のシャマンの一種である。

シャマンの義理の祖父の後継者が代わったが、その要求が一貫性をもつ。同じ守護霊の性質、性格、スタイルが、後継者が交代しても変わらないという現象・見方は、ホルチン地方のシャマニズムの特徴である。

HGZ シャマンによると、ライチン・シャマンの使う太鼓は、両面太鼓である。そのため、DGL の生前ライチン・シャマンだった曾祖父が憑依すると、両面太鼓を要求するのは、HGZ シャマンの語りと一致する。HGZ シャマンの太鼓は、もともとは両面太鼓であると信じており、仏との勝負で破れたので、穴がついた片面太鼓となったと伝説を再認識している。また、HGZ シャマンは、ライチン・シャマンが、もともと両面太鼓を使っているのは、仏との勝負を行わなかったからであり、仏との勝負で破られたので、穴がついた片面太鼓となったと認識している。HGZ シャマンによると、この知識を弟子入り先の先生に伝授されたという。HGZ シャマンの語りから、シャマンの間で、仏との勝負の伝説が根強く信仰されていることが伺える。ライチン・シャマンの起源は、先述したように、仏教とシャマニズムの習合によって現れたシャマンの一種である。そのため、ラマの用いる両面太鼓を使うのが、その特徴である。事実上、ホルチン地方のシャマンの片面太鼓の起源は、仏との勝負の伝説よりすこぶる古いと思われる。

## 2) 太鼓の保管

ホルチン地方では、シャマンたちは、普段、太鼓を居間の壁にかけて保管する、あるいは、シャマンの装束、道具と一緒に決まった場所に保存しておく。MNH シャマンの話によると、太鼓を壁にかけるときには、太鼓の叩く面を壁側に向けて、かけておく。その理由は、叩く面に呪文の力がしみ込んでいるため、太鼓の叩く面を外へ向けると、汚れると懸念しているからである。一方、叩く面を外に向けて壁に掛けている現象をも目撃されている。どの方向に向けて掛けるかという点には、あまり拘らないという。また、シャマンによっては、手を洗わずに、あるいは月経中の女性が太鼓を触ることを忌むシャマンがいる。この意味で、シャマンたちは、太鼓を聖なる道具と認識する一方、保管する点では、バリエーションがあることが見受けられる。

フィンランド人のサカリ・ポルシが、1909年にバヤンゴル<sup>(1)</sup>周辺を旅した際に、モンゴル・ゲルの内側にもたせかけてある太鼓を撮ったことを、ミハイ・ホッパーは、「民俗学写真の歴史の幕開けとなったもので、その価値は計りしれない」[ミハイ・ホッパー 1998: 164]と評価する。その写真を見ると、やはり太鼓の叩く面を壁に向けている。

## 3) 太鼓の代用品

近年、シャマニズムが復活しつつある中で、新参シャマンが太鼓の代わりに、チャンや鈴を用いる

---

(1) 今日の新疆ウイグル族自治区のバヤンゴル・モンゴル族自治州ではないかと筆者は考える。

ことも見られる。ホルチン左翼中旗 MT 村に住む LJS<sup>(1)</sup> シヤマンは、父親をシヤマンにした守護霊に選ばれて、シヤマンになった。父親が亡くなったときに、シヤマンの道具の扱い方が間違ったら大変な事態を招くのではないかと懸念して、シヤマン服をはじめ、太鼓などを副葬した。当時、LJS シヤマンは自分がシヤマンになるとは夢にも思っていなかった。しかし、自分がシヤマンになったときに、太鼓をまず必要としたが、すぐ入手できないため、チャンを購入した。そして、チャンを打ち鳴らして神歌を歌って守護霊を招き呼ぶ。ホルチン地方では、太鼓とチャンの両方を持つシヤマンがいる。またさらに、鈴を持つことも珍しくない。降臨してきた守護霊がシヤマンの周りを徘徊し、なかなか体に憑依しない場合は、守護霊を興奮させて、早く体に入らせる、すなわちトランス状態にさせるため、会衆は、足を踏み鳴らし、いろいろと口ずさみつつ、リズムカルに手拍子し続けることもみられる。この場合、手拍子の音が太鼓の役割を果たしていることになる。

ニオラツツエ、ウノ・ハルヴァは、それぞれ、シベリアのシヤマンが太鼓を用いない場合は、その代わりに使われる道具を紹介している。「例へば、ブリヤート族のシヤマンは今では最早一鼓をも用ひず、ロシアの鈴を所持する<後略>」。ニオラツツエは、「魔法の太鼓は、之なくして供儀又は祈禱をも行ふことが出来ぬといふ程、シヤマンにとって重要な器具であるとは思はれぬ」[ニオラツツエ 1943 : 116-117]。「ブリヤートのシヤマンも白樺の樹か鉄で作った《馬》と称する杖を二本もって、その握る部分は馬の頭になっていて、下端はひずめに似ている。<中略>そのいずれにも、ガラガラや沢山の森林小動物の毛皮がつけてある」[ウノ・ハルヴァ 1971 : 477-478]。著作の中で、ニオラツツエとウノ・ハルヴァが太鼓の代用品をいろいろと紹介しているが、一点で一致している。すなわち音を立てることである。ホルチン・シヤマンのチャン、拍手、鈴もみなそうである。ニオラツツエは、シヤマンにとって、太鼓は思うより重要なものではないと述べている。ニオラツツエがこう考えるに至ったのは、これらの道具は太鼓の立てる音を代用することができるからである。この意味で、太鼓の本質は、その打ち鳴らすと出る音にある。太鼓そのものより、音がシヤマニズムの世界で持つ意味がより重要である。その音は、神、守護霊の音である。これは、太鼓の機能の根幹をなしている。

## まとめ

本論では、まず、内モンゴル・ホルチン地方におけるシヤマンの太鼓に関する伝承を紹介し、解釈を試みた。次に、ホルチン地方のシヤマンの太鼓の構造と機能を紹介した。ホルチン地方で、仏教を普及させるプロセスは、シヤマニズムとの衝突、融合のプロセスでもある。そのため、今日のシヤマンの装束・道具の形状は、主にシヤマンと仏の勝負をモチーフに語られている。即ち、ホルチン地方のシヤマンの元祖と言われるホブグタイ・シヤマンがボグダ（仏）との勝負で、両面太鼓が打たれて

<sup>(1)</sup> 男性、農民、ホルチン左翼中旗在住。

穴が開いた片面太鼓となったと伝承されている。シベリアの諸民族のシャマン太鼓はほとんど、棒状の柄がなく、太鼓の裏側に皮紐の取っ手をつけた片面太鼓である。ホルチン地方の周辺の満洲族の場合、今日のホルチン地方に見られる団扇太鼓とシベリアに広く見られる柄がない片面太鼓がある。また、モンゴル国のシャマン太鼓は、シベリアの片面太鼓の形を示す。したがって、ホルチン地方のシャマンが用いる太鼓は、もともとは片面太鼓だったと思われる。仏教の影響を受けて、シャマンの太鼓のデザインに変化が生じたと推測する。

シャマンにとって、シャマンの果たす役割は依然として保たれている。太鼓の本質は、音を出すという点にある。その音に、精霊の力が宿っている。また、音自体が精霊の音としても認識される場合がある。シャマンは、太鼓を叩いて守護霊を呼び寄せて、トランス状態に入る。また、太鼓は、シャマンにとって、「教科書」である。太鼓を叩いて、神歌を覚え、歌うことができる。これ以外に、太鼓の音で悪霊を追い払ったり、占いをしたりする。現在、ホルチン地方で、シャマンは自分や弟子のために太鼓を作ったり、贈呈したりすることを行っている。こうしてみると、現代に生きるシャマンにとって、太鼓はそのアイデンティティの証であると言ってよい。

(さらんごわ・千葉大学社会文化科学研究科)

## 参考文献

<日本語>

ウノ・ハルヴァ 田中克彦訳 1971

『シャマニズム—アルタイ系諸民族の世界像—』三省堂

エリアーデ 堀一郎訳 1974 『シャマニズム—古代的エクスタシー技術—』冬樹社

岡崎譲治監修 1982 『仏具大事典』鎌倉新書出版

喜吉設了 1944 「ジョト・ホルル—その他に就いて」(『満洲民族学会会報』第2巻2号 pp. 7-8 山下晋

司・中生勝美・伊藤亜人・中村淳編 2002 『アジア・太平洋地域 民族誌選集 29』pp. 87-88 再収) クレス出版

鳥居きみ子

1927 「第百六章 シャーマンの研究」『土俗学上より観たる蒙古』大鏡閣

鳥居龍蔵 1975 『蒙古旅行』鳥居龍蔵全集 (9) 朝日新聞社

ニオラツツエ 牧野弘一訳 1943 『シベリア諸民族のシャーマン教』生活社

蓮見治雄監修 1996 『モンゴル秘宝展—チンギス・ハーンと草原の記憶』

日本経済新聞社

ミハイ・ホッパー 村井翔訳 1998 『図説 シャーマニズムの世界』青土社

ミッキー・ハート 佐々木薫 訳 1994

『ドラム・マジック／リズム宇宙への旅』 工作舎

楊海英 2004 『チンギス・ハーン祭祀 試みとしての歴史人類学的再構成』 風響社

<モンゴル語>

オ・プルブ 2006 『モンゴル・シャマニズム』 民族出版社

ジムバ 1998 「モンゴル・シャマンの太鼓の文化」 『内モンゴル社会科学』

1998年6号（総97）内モンゴル社会科学院

フルレシャ、白翠英ほか 1998 『ホルチン・シャマニズム研究』 民族出版社

レ・ホルチャバートル、チ・ウジマ 1991 『モンゴル・シャマニズムの祭祀文化』

内モンゴル文化出版社

<中国語>

郭淑雲、王宏剛主編 2001 『活着的薩滿—中国薩滿教』 遼寧人民出版社

劉兆和主編、鉄達、慶巴図編著 2008 『蒙古民族文物図典—蒙古民族宗教文化』

文物出版社

劉桂騰 1999 『滿族薩滿樂器研究』 遼寧民族出版社

<欧文文献>

Finch, Roger 2003 The Shaman's Drum of Shiberia and the Far East (シベリアと極東における

シャマンの太鼓) 『駿河台大学論叢』(26号) 駿河台大学教養文化研究所 pp. 76-109

## The drum of the shaman in the Inner Mongolia Horqin district

Sarangowa

### **Summary:**

The drum is an important tool and musical instrument for the Inner Mongolia Horqin province shamans. The drum is fan shaped, has a small hole, is one sided with a handle attached to it. The small hole symbolizes the collision of buddhism and shamanism. The essential function of the drum is in its sound. The sound effect of the drum enables the shamans to memorise the chants, summon the guardian spirits and drive away evil spirits. In the Horqin province, there are examples of the use of cymbals and bells as a substitute as they have a similar sound effect to the the drum.